



▲息を合わせ、石を割り出します



現在の軟石採石場
と採石の様子



▲垂直に切り込みを入れます



▲手作業で切り出しをしていた
ころの道具



(右中央上部の白い岩

約三万二千年前、現在の支笏湖周
辺で、激しい火山活動が起り、
大規模な火砕流が石狩平野の中・
南部まで押し寄せ堆積しました。
この堆積物は高温と圧力のため
溶けて押し固められ、その結果で
きた溶結凝灰岩が札幌軟石で、
支笏噴火溶結凝灰岩と呼ばれます。
この軟石が発見されたのは、今
から百三十年以上も昔のことです。
明治二年、開拓使が札幌本府づ
くりを開始し、アメリカから招へ
いたした開拓使顧問ケプロンが、本
府建設にあたり石材を使用した洋
風化建築を提言しました。開拓使
も防火性のある建物の建築が必要
と考え、その方針を決定。こうし
て建築資材となる石材探しが始ま
り、明治五年、地質・鉱山技師ア
ンチセルが石山一帯の地質調査で
軟石を発見しました。
軟石は名前の通り、ほかの石に
比べ軟らかいため加工がやすく、
建物の土台や壁などに利用でき
ることが分かり、明治七ころから
採石が始まりました。断熱性に優
れた建築資材として用いられ、明
治八年で採石量は約二万個、最盛
期（大正〜昭和）には三十万個。



から硬石山を望む

石材店も百軒を超え、石山地区は
活気に湧いた時代でした。
切り出しは全て手作業で、約
三百人の石工たちは、何種類もの
道具を使い様々な大きさの石材を
仕上げました。機械を使用するよ
うになったのは昭和三十年代半ば
のことでした。
人気の高い軟石でしたが、大正
時代にコンクリートが登場すると、
用途の幅広さと低価格性などから
徐々に需要が減り、戦後にはコン
クリートが大勢を占めるようにな
りました。
現在、札幌軟石を採石するのは
辻石材工業株式会社のみとなり、
採石量は年間約六百五十トンです。
墓石としての需要が多かった時期
もありましたが、近年は、その風
合いを生かした床材や外壁材、造
園用石材など、さまざまな用途に
合わせて加工し提供しています。
村井均主任は「機械化が進んだ
とはいえ、割り出しなどは今でも
手作業です。経験を要する仕事な
ので後継者不足が心配ですが、こ
のすばらしい石を後世に残し、こ
れからもどんどん利用して欲しい
と思います」と語りました。

軟石を使用した建造物



▲札幌市資料館（旧札幌控訴院）【(中)大通西13】



▲ぼすとかん（旧石山郵便局）【(南)石山2-3】